

令和5年度 第2回 津山市総合教育会議 議事録（要旨）

- 1 日 時 令和5年12月20日（水）午後 2時00分～3時30分
- 2 場 所 市役所2階 第1委員会室
- 3 出席者 谷口市長、有本教育長、薬師寺委員、光岡委員、福見委員、土居委員
住野みらい戦略ディレクター
- 4 同席者 企画財政部 針生政策推進監
みらいビジョン戦略室 笠尾室長、金井参事
教育委員会 森上教育次長
教育総務課 梅原課長
学校教育課 高岡課長、平井参事、石原参事、梶並参事
森参事
- 5 会議日程 1. 開 会
2. 市長挨拶
3. 議 題
津山市教育振興基本計画（第3期）2年目のふりかえり
4. その他
5. 閉 会

議事要旨

◆事務局

それでは定刻となりましたので、ただいまから令和5年度第2回津山市総合教育会議を開催させていただきます。

私は本日の進行を務めさせていただきます、津山市 政策推進監の針生でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日、みらい戦略ディレクター 住野 好久様にご参加いただいておりますことをご報告させていただきます。

会議を開会にあたりまして、谷口市長からご挨拶申し上げます。

◆市長

皆さんこんにちは。

今年度の第2回の総合教育会議を開催をさせていただきましたところ、ご多忙の中ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

さて、いろんなことが取り沙汰されている昨今ではございますけれども、特に地方の中では人口減少もございまして、あるいは地域経済の疲弊と言われてるわけでございますけれども、持続可能な社会を築いていくためには、地域で活躍する人材を育成していくことが、不可欠であると考えているところでございます。

本市におきましても、第5次総合計画の重点項目の中の一つ「教育の充実で未来を切り拓く人材を築く」を掲げており、皆様方と気持ちを一つに、同じ方向を向いて取り組んでいきたいという思いを持ってるところで、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

さて、本日の会議におきまして、先程も司会からご紹介がありましたが、教育部門のみらい戦略ディレクターとして、この振興基本計画を策定する際に、検討委員会の委員長を務めていただき、日頃より本市の教育行政に対しまして、大所高所からご指導いただいております、住野 好久先生をお迎えをしております。先生どうぞよろしくお願いをいたします。

令和4年3月に策定いたしました、「津山市教育振興基本計画の2年目のふりかえり」を今日はテーマといたしまして、住野先生と教育委員の皆様方に広い視野から忌憚のないご意見を頂戴したいと思います。

本会議を意義あるものとして進めてまいりたいと考えておりますので、どうぞご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆事務局

谷口市長ありがとうございました。

それではここで、住野ディレクターのご紹介をさせていただきます。

住野ディレクターは、これまで香川大学、岡山大学を経て、現在は、中国学園大学・中国短期大学 副学長を務めておられます。教育と福祉をつなぐ子どもの発達保障や乳幼児保育、学童保育など教育方法学を専門に研究されており、日本で最初に「学童保育指導員」の資格制度を創設した法人である、NPO法人 日本放課後児童指導員協会の理事長としてもご活躍されております。

昨年3月に策定した、「津山市教育振興基本計画（第3期）」の検討委員会の委員長としても、ご尽力いただきました。

また、昨年7月から本市のみらい戦略ディレクターとして就任いただき、主に教育分野につきまして、専門知識やご経験を活かしてご助言やご提言をいただくこととしております。

それでは、住野ディレクターより、ひとことご挨拶をいただきたいと思っております。

◆住野ディレクター

ただいまご紹介いただきました住野でございます。

私を今、教育と福祉をつなぐというふうに紹介いただいたんですけれども、さかのぼってみれば、元々は学校教育の研究をしております、岡山大学の時代には県教委の事業で、津山の幼稚園や小学校、中学校、高等学校に行き、「一緒に校内研究を充実させよう！」ということで関わってまいりました。そういう意味では、津山の学校教育には、昔から接点がございました。

そのつながりで、教育振興基本計画の策定に関わらせていただいて、今日はその進捗状況を市長と、そして教育委員の皆さんと一緒に検討できるということで、楽しみにしてまいりました。

皆様のお役に立てるようなコメントができればなと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

◆事務局

ありがとうございました。

それでは議題に移ります。

津山市総合教育会議運営要綱第3条に基づき、会議の進行を市長にお願いしたいと思います。市長よろしくよろしくお願いいたします。

◆市長

それでは着座のまま進めさせていただきます。先程、冒頭のご挨拶でも申し上げたんですが、「津山市教育振興基本計画の2年目のふりかえり」をテーマに協議をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いを申し上げます。

このふりかえりにあたりまして、この計画の中で本市の目指す人間像として掲げております、「自立・つながり・郷土愛」の取組の中から、教育委員会が特に重要課題として取り組んでおります4つの取組を取り上げまして、現状と今後の取組について、皆様からご意見をいただきたいと思います。

それではまず自立の取組から、本日は「読解力の向上」と「若手教員の育成」ということにつきまして、事務局より説明をいただきたいと思います。

◆事務局

自立、確かな学力向上の中から、「読解力の向上」、それから「若手教員の育成」について説明をさせていただきます。

お手持ちの点検・評価報告書抜粋資料の26ページ、教育振興基本計画でしたら46、47ページをご覧ください。現在の状況についてお話をさせていただきます。

「読解力の向上」につきましては、本市でも各学校で取り組んでいる「学びのサイクル」と家庭学習、それから補充学習等を分けまして、その中に新聞教材等のワークシートや、学校司書との連携をした読書活動の連携を通じての手だてを各学校に位置付け取

組を進めています。

また令和4年度より、AIドリル「navima（ナビマ）」の中で、子どもたちの読解力育成の問題等を活用しながら、各学校への取組の推進をしております。

そういった状況の中、別紙カラーの資料の1枚目下側部分（右端2ページ）に岡山県と全国の学力学習状況調査における「書くこと」と「読むこと」の領域平均正答率について、赤枠で囲っているところで、本市の現状を示させていただいています。

一番下の全国比の部分が黒三角（マイナス）になっているところが全国と比較して、津山市に課題があるところ、印がついていないところは、成果として見られるところです。

特に、令和4年度の小学校5年生の「読む」というところがマイナスの2.1から、青枠で囲んだ令和5年度の全国学力調査の小学校6年生では1.1に伸びている数値が、見て取れるのかと思います。本市では先程申し上げたとおり、AIドリル「navima（ナビマ）」と、「よむYOMUワークシート」を活用しております。

別紙資料の2枚目上側（右端3ページ）には、新聞教材等を活用しながら各学校の方で「書き出す」とか「抜き出す」とかいったような活用を、学校でされている例を紹介しております。

本年度より、「よむYOMUワークシート」につきましては、市内すべての小学校4、5、6年生と中学校1、2年生で、この教材を使い読解力向上に関する取組を進めているところでございます。

特に新聞教材を使うことによって、「語彙力・正確な国語文法」、「文章を正確に捉えられる論理性」、それから「長い文章を抵抗なく読める力」の育成を図っているところでございます。

その次の3枚目上側（右端5ページ）では、小学校における取組として、新聞教材を活用し、書き込みをしながら子どもたちに指導している一場面を捉えた紹介資料となっております。

成果と課題につきましては、子どもたちが文章をたくさんの情報の中で「書き出す」、「抜き出す」ことについて、抵抗感が少なくなってきた、それから、子どもたちが書くことに抵抗感が少なくなってきたというところではありますが、やはりまだ読解力につきましては、問題文自体をしっかり読み解くことが求められており、問題の正答率はまだまだ低いところが課題であります。

語彙力について、子どもたちもデジタル教科書等を使っておりますが、語彙力や文書を丁寧に読み取る力が不足しているところからも、今後、読解力向上の取組を一層進めてまいります。

続きまして、教育振興基本計画47から48ページにございます、「若手教員の育成」の取組についてでございます。

こちらは、本市独自に若手教員育成シートを活用して、5つの視点、教員としての確かな指導力や同僚性等の視点によって、各学校に示させていただいております。

本市の現状といたしましては、津山市の新採用の若手の先生方、それから育休や病休

の先生方がたくさんいらっしゃいまして、講師の先生方もたくさん勤務されております。

そういった中で、授業力や生徒指導面の指導力の低下、コミュニケーション不足、それから教員としての使命感、倫理感の希薄化等、ここ3、4年のコロナ禍によって更に不足しているというところです。

本市といたしましては、学校経営に実績のある退職校長を学校経営アドバイザーとして教育委員会に配置し、学校訪問を巡回式で回っております。

また、管理職に対し学校経営や若手育成のサポートもしております。

ちょうど別紙のカラー4枚目上側（右端7ページ）に、昨年度の取組ですけれども、対象となる小学校教員38名と中学校15名の春から年度末にかけての先生方の進捗状況を示させていただいております。

アドバイザーが訪問することで、まずは若手の弱みを管理職が把握して、具体的な方向性が明確になったということですが、教員として、課題、基本となる資質の部分については、指導だけではなかなか難しいというようなことがありまして、そういった視点でも、今日ご意見いただけたらありがたいと思います。

◆市長

ただいま読解力の向上と若手職員の育成ということにつきまして、本市の取組についてご説明申し上げたところでございますが、ご意見をいただけてまいりたいと思います。

最後に住野先生にまとめていただくことといたしまして、教育委員の皆様方から読解力の向上につきましてご意見をいただきたいと思っております。

◆教育委員

今説明があったように、読解力に課題があるということで、その解決のために、すべての学校でAIドリル「navima（ナビマ）」の読解力育成の活用と各校がそれぞれ新聞教材を取り扱ってきた。また、読書活動の推進、授業改善も各校で取り組まれてきたと思います。

その結果、今年度の全国学力調査で、小学校6年生は全国比がプラスになった。本当にうれしく思っています。

「書き出す」、「抜き出す」ことに抵抗感がなくなった、「書き方がわかってきた」などが示されていると思いますので、引き続き、すべての学校でAIドリルを活用する、さらには、すべての学校で新聞教材、よむYOMUワークシートを取り扱っていくという取組を、学びのサイクルに位置付けて継続して取り組んでいくことが、とても大切であると感じています。

そうすることによって、課題である問題文自体を読み取ることや、丁寧に読み取る学習活動の成果があらわれてくると思います。来年がまた楽しみであります。

また、学校訪問を今年度10数校行かせていただきました。その中に、校内研究で国語科を取り上げて、読む力・表現する力の育成をテーマに研究している学校や、説明文読解法をテーマに読み解く力をつける研究をしている学校などの、説明を聞いてまいり

ました。AIドリルも大切だと思いますけれども、授業改善を進めてくださって、子どもたちが読みとる能力を高めていくというのがとても大切だと感じています。

◆教育委員

小学校6年生は上がったけど、他の学年では「読む」は下がっています。ただ、「書く力」は高いですね。だから、これは、これからに期待したいとは思いますが、どこに課題があると今認識しているのか、課題分析が欲しい。「読む」という力を1年ぐらいやってみただけども、こういったところに課題があるなっていうことが、もし分かれば教えていただきたいと思います。

なんかすごく力を入れてるけど、例えば小学校5年生は令和5年度はマイナス4.6で、前年度小学校4年生の時がマイナス0.9でむしろ下がっていると、こういったところに課題があるのかということをお教えいただければと思います。

◆市長

事務局からお答えをよろしいですか。

◆事務局

学校から聞き取ってないところがあるんですけども、しっかり子どもたちが問題を読むというところについて、正確に読み取るという部分が苦手なのかなという部分と、昨年度、学校にそれぞれ読解力に課題があるので、例えば新聞教材を使ってやってみませんかと提案したところ、それぞれ各学校が工夫を行いながら、取り組んだのが令和4年度です。

令和5年度につきましては、それぞれ学校から意見をいただきまして、「よむYOMUワークシート」の方が子どもたちにしっかりと力をつけていくのに良い教材だろうということで、本年度より、全校統一として取り組んだという結果でありますので、来年度、この取組を基に、こういった成果になるのかということを検証していきたいと考えております。

◆教育委員

せっかくなので先生方からやってみて、こういったところが難しいとか、やっぱり現場の方がこれやっているのに伸びなかったけど、こういうことかなというご意見を聞いたら私もうれしいかなと思います。

◆事務局

実はこの12月に、各学校に今年度の取組状況について成果や、取り組んでみてどうだったのかとか、有効だと思った手立て等をお聞きしますので、また委員の方にこういった結果でしたということをお返しできたらと思います。ご意見ありがとうございます。

◆教育委員

子どもたちの読む力ということであれば、やはり全文読みとか部分読みをしながら、今拡大する機械で教科書を大きく引き伸ばしながら、子どもと一緒に読み取りをしっかりとっていくということが大事ななと思っております。

それで、「navima（ナビマ）」も全校で導入していただいているわけですから、そういうものを活用しながら、しっかりと読み取る力をつけてもらいたいなと思います。

それから、今新聞をうまく活用しながら、その中での語彙力といいますか、そういう言葉の使い方をしっかりと捉えるのは、大事なことだと思って期待をしております。

◆教育委員

本当にAIドリル「navima（ナビマ）」を導入されてですね、これ実際に宿題とか、休み時間とか、家庭でも使われているということですので、かなり効果があるというか有効なツールが出てきたなというふうには感じています。

それとやはり今、家庭で新聞を取られる所がもうかなり減っていますので、そんな中で、この「よむYOMUワークシート」は、実際レベルが若干高いかなとは思いますが、でもこれを学校においては週末課題とかでも出されてますし、そういうのを続けていくことは、本当に今すぐの力でなくても今後中学・高校に上がっても、基礎がついていくんじゃないかなというふうには感じています。

それとAIとかそういったものと、今以前からやっているようなアナログなプリントの配布、学校訪問とか行ったら、各学校にレベルに合ったプリントを配布して、学校によっては、個人面談の時に親に個票を出して、「このところができてませんよ」というような形で、後で親と一緒にそのプリントを家で勉強するといったようなことも、一校から始まったことがずっと津山の学校にも広まっていったようなことがありますので、今ちょうど過渡期なのかもわからないですけど、最先端を使いながら、またアナログの方法も併用して、保護者、家庭教育を巻き込んでやっていくといったような学校では横の連携は結構進んでるのかなと思います。

何かいいことがあったら、それを他でもやってみようといったようなことは、結構伝わってきてるのかなというふうには感じています。

◆市長

ありがとうございました。

読解力ということについて、それぞれの委員の皆さん方からご意見を頂戴しました。継続をすること、授業改善が必要とか、特に現場の声をしっかりと聞きなさいということ。これについてはまた、お話をする機会もございましょうということです。

また、視覚に訴えるということですね。ICTをしっかりと使っていくこと。

最後に出てきたのがアナログプリントなど、いろんな取組をしていかなきゃいけないわけではありますが、総じてですね、いい方向に向いているというご意見はいただけたのかなと思ってまして。

教育長、この件について皆さんの意見を受けてお願いします。

◆教育長

読解力については、本市の大きな課題です。もう長年の課題でした。一例挙げれば、全国学力調査でも無回答率が全国平均より高い。つまり、書けない、答えられない、問題の意味がわからない。そういうところが大きな課題でしたから、そういう点でA1ドリルであるとか、あるいは「よむYOMUワークシート」を何校かで試行していただいて、その中で全校実施という形でやっているの、もうしばらくこの様子を見たいなと思っています。

それから、先程も出ました授業改善。私も教育委員の皆さんと一緒に学校訪問に行つて、小学校の授業が変わったというのは実感しています。

今までの教え込む授業ではなく、自分たちで課題を見つけて、その課題についてみんな話合せて、そして思考しながら、自分たちで答えを導いていくという授業となっています。

もう明らかに変わってきていて、本年度特に変わったのが、ICT化です。タブレットの使い方が豊富になってきたなという感じがいたします。だから、今回の令和4年度の評価は、タブレットの活用はあまりいい数字ではないんですけど、多分来年はぐっと上がってくるのかなと思っています。

ただ、常々学校に言っているのは、あくまでも「navima（ナビマ）」にしても「よむYOMUワークシート」にしても学習の手段なので、その辺をしっかりわきまえて欲しいという話はしています。

◆市長

はい、それでは続きまして、「若手教員の育成」ということにつきまして、お尋ねしてまいります。

◆教育委員

若手教員の指導というのは、学校訪問等でも回らせていただいて感じたことが、やはり先生方が自信を持って子どもに接してもらいたいなということをおもいました。

私から思えば、やや声が小さい。アピールする力というか、ここを子どもたちにわかって欲しいなあって、後ろの方まで届くような声をしっかり出しながら、そして子どもたちを引きつけていく。そういう授業になるように、若い人が頑張ってもらえればいいなということを感じました。

子どもの思う学習規律の確立というわけではないんですけども、拳手をして返事をするとか、そういうようなものをきちっと課題として捉えながら、それが段々と高学年になり、自信を持って学習展開ができるようになればいいなというふうに感じております。

今本当に先生方も、すばらしく優秀な先生方が多いので、もっともっとすばらしい授業展開ができるものと思っています。

◆市長

ありがとうございます。

いや、おっしゃるように本当そうだと思いますね。声は基本だと思いますね。子どもたちにもそういう熱気というものって、私は伝わっていくと思うんですよね。

◆教育委員

本当に小学校でも今若い先生がたくさん増えてますけれども、なかなかこのコロナで、先生同士のコミュニケーションであったり、先生と保護者とのコミュニケーションであったり、そういったところがなかなか取れない時期が続きましたので、若手の先生も、まだそういったことに慣れてないとか、保護者対応に慣れてないとか、コミュニケーションが取れてないからこそそのすれ違いといったようなことも、やっぱり多かったのかなというふうに思います。

今年になっていろんな活動が再開していますので、そういった意味では、僕らも若い先生方と話をする機会も増えてきましたし、また変わってくるのかなというふうに思います。やっぱり今学校で、高学年になったら教科担任制を敷いていたりというような学校も増えてきてますけれども、本当に若手の先生にとっても非常に有効な方法になっているんじゃないのかなというふうに思います。

その先生だけが見るのでなく、いろんな先生の中で見ることができるとか、あと学年担任制で複数で見るとか、複数担任もまた今検討していたり、そういうところもありますので、やっぱり若手の先生とベテランの先生がセットになって、子どもを教えながら、若手の先生の成長も、みんなで守ってもらうといったような流れはできてきているのかというふうには感じてます。

◆教育委員

先程言いましたように、今年度 10 数校学校訪問させていただいて、授業参観もさせていただきました。若い先生が多く、若手を育てるということは急務だと感じています。

必要な取組として、若手教員育成シートと学校経営アドバイザーの取組があると思います。アドバイスを受け、学校の先生がチームとして協力し合って若手を育てていく、この成果は非常に大きいと感じています。

教員に必要な力はたくさんあると思いますが、やはり授業力だと思います。

1 日の学校生活の 6 割以上が授業でしょうか。子どもが楽しく生き生きと学ぶ学びに向かう授業であるとか、主体的、対話的で深い学びの授業を展開する力が大切だと思います。

また、授業の中で学習規律をつくる力、集団づくり力、学級経営力が、教員に求められていると思っています。

1 日の学校生活、先程授業が、6 割以上と話しましたがけれども、そのほとんどが、学級を土台として成り立っています。

学級は落ち着いた心地よい場所となるよう、教師と児童生徒との信頼関係であるとか、子ども同士の間関係そういうものが、きちっと作り上げられる教師でないと、なかなか、すべてのことがうまくいかないと感じています。

この授業力、学習規律をつくる力等の二つの力が必要であると思っています。

また、感じたことの中に、若手教員を育てる中堅教員が少ないことがあります。ですから、校内OJTを進めることができにくくなってきているのかなと感じています。そこで、本市の若手教員に対して模擬授業等を行って、授業モデルを示す。これは非常に大切であると感じています。

特に、毎日指導する教科の国語・算数は、毎日時間割の中に組み込まれていると思いますので、国語・算数について、モデルとなる授業を提供していく必要があると感じています。

コロナ禍前、本市の授業改革推進員のそういう取組を参観したことがありますので、ぜひまた行っていただければと思っています。

◆教育委員

私も学校訪問に行かせていただいて、先生方のおっしゃる通りで、もうちょっと元気があった方がいいなというときもありますが、学校の校長先生のお話を聞くと若手を育てる、育てたいという意識は伝わってきます。

それから若手から中堅に上がるぐらいの30代ぐらいの人を、ある程度ポジションにつけて責任持ってやってもらうということで、責任持たせて育てるっていう意識を持っている学校もあったりして、学校によりやり方もそれぞれだと感じるんですけど、格段に若手の人が多いっていうのは大変だなと思います。

ここに書いてある教員の使命感、倫理観の希薄化など、これはもう教員に限らず、全体的な問題な気がします。私たちが思う教員って結構パーフェクトというか、学級経営もできて、教えることもできていたけど、今の若い人なんかを見ると、このチェックシートを見ると多分愕然とすると思うんですけど。

今の若い人たちは、いいところを強調して褒めてあげて育てるとというのが、もう今主流になってきて、福祉現場で、私に聞かれるのは、「どうやって育てたら良いですか」って。福祉現場はもう叩かないですよ。だから、厳しく言わなくて、いいよいいよって育てるんですけど。

でも、先生方はもう全体的に若い人がどうなのか難しいところあるんですが、本当になかなか今まで思ってた教員像と、今の世代間の難しさをすごく感じています。

でも、若い人が増えるのも仕方がないので、全体として教育力というか、もう人間性も含めてこう上げていくという取組を、やっぱり言われたように、もちろん授業もそうですし、ちょっとグループワークじゃないですけど、研修とか、同世代の間で話をさせてみるとか、前向きに進めるような形を皆さんで取っていただいて、せっかく教員になってもらったので、「いい教員に私たちが育てる」という意識でやっていかないといけないんじゃないかなと思いました。

結構、本当に人手不足で教員不足で大変だと思うんですけども、やはり一人一人の教員の力が、教育にはとても大事になってくるので、大変だと思いますけど、そこはよろしくをお願いします。

◆市長

ありがとうございました。

若手教員というところは、4人の先生方の表現は違うんですけど、人間力といいますかね、要するに元気を出せと、子どもに伝わらないよと。その声の面だったり、アピール力だったり、そういうことをおっしゃられたと思うんですよ。また、人間力アップしましょう、でも難しいよね、指導もねという話でありまして、何て言うんでしょうね、ほめて育てようとか、グループワークしようとか、言うべきことというのはそれは申し上げていかなきゃいけない。

でも、やっぱり人としてということですよ。また、教科担任制とかあるいは、複数担任制とかそういう制度的なことをおっしゃられました。やっぱり授業が大事だと、授業力だと。だから、模擬授業でもやって、それでこの授業モデルを皆さんに示したらどうだというお話で、非常にそれぞれご提案もいただきながら、人間力を高めることと、実際の現場ということで、「現場と組織」というこの二つが出てきたんですけども。

では、教育長をお願いします。

◆教育長

私も若い頃は、生徒たちに元気出せとか言ってたんですけど。例えば、私いつも朝体育館の前に立っているんですけど、高校生が自転車で来るんです。そしたら、大きな声で「おはようございます」って言う子もいれば、ペコッと頭下げる子もいるし、でも別にペコッと頭を下げる子が無視しているわけじゃないし、彼なりに挨拶してくれた、それでいいのではと思っています。この後はちょっと住野先生にいろいろアドバイスをいただきたいんですけど、校長先生方と面談をした中で、今一番、校長として時間を割くのは何なのかと聞いたら、やっぱり新採用の教員の指導と言うんですよ。これにすごい時間がかかると。

だから、よりきめ細かく、もう1から10まで教えていかないといけないと。

私が教員になった頃は、もう先輩から学べと、先輩から見て学べというぐらいでしたから。だけど、今はもうそんなこと言ったら通用しない、と校長には言われます。

特に本市では、先程も説明にありましたような学校経営アドバイザーが、きめ細かく回ったりしながら、相談できる機会や場を設定しているので、そういう点では非常にありがたいと思うんですが、今のこの人材不足、こういう状況の中で、とにかく一人で抱えるなどと言ってもどうしても、いくらか責任を持ってやろうとすれば、気がついたらもう抱え込んでいる実態があります。

それをできるだけ回避したいということで、本市としては、学年で子どもたちを見ていこう、一人で見るとはじゃなくて複数で見ていくという、そういう体制を来年度は全校

的に展開をしたいなと思っています。この若手指導というのは、ぜひ住野先生にお聞きしたいと思います。

◆市長

教育委員の皆さん方からご意見をいただいたところでありますけど、住野先生から「読解力の向上」と「若手教員の育成」について、住野先生からご指導いただけたらありがたいと思います。

◆住野ディレクター

一つ目の話題でありました、「読解力の向上」ということですが、読解力というのは、特定の教科の授業とか学習を通して獲得されるものではなくて、子どもたちのすべての学び、生活、遊びの中から獲得されていく、そういう力ですね。

すべての教科、学力の土台となる力だし、ある意味、人にとっては教科の学力よりも、読解力を持っていることの方が、大人として社会で生きていく上では役に立つ。本当に重要な能力だと思っています。

そういう読解力という力を、「本市は本気になって子どもたちにつけようとしてるんだ。だから、津山市内の学校の先生たち、そしてお父さん、お母さん、子どもたちに読解力つけていきましょうよ」と、まずそういう意識をちゃんと持つということが大切なのではないのでしょうか。

つまり、「国語の力をつけないといけない、算数の力をつけんといかんというのはわかりやすく、先生もそのために教科の授業をやってるわけだし、それはわかるんだけど、読解力って何？ それ聞いたことないけど、それどんなふうにつけたらいいかわからん、そんなの必要なの？ それよりも算数やとった方がいいんじゃない」という認識がある限りは、なかなか読解力を全市を挙げて子どもたちに獲得させていこうとはならないのではないかと思います。

「子どもたちに読解力をつけていくということが大切なんだ。それはこういうことからです」というのを、わかりやすく学校の先生たちや保護者が理解できるようにする手立てが必要ではないかと思いました。

そして、読解力を高めるために『よむYOMUワークシート』に各学校でいろんな形で取り組んでください」ということだけでも、「これ国語科でやらんといかんことかな、国語は国語で教科書をしないといけない。じゃあこれはどの時間でやるんですか？」となって、そういうところでぶれてしまうような気がします。それでは、この「よむYOMUワークシート」も十分浸透しなかったり、成果を上げられないと思います。

だから、津山市の子どもたちの読解力が課題であり、そこを上げていこうとするのであれば、「読解力を上げていくことが、子どもたちのこれからの人生において欠かせない能力なんだ」という意識を共有できるような何かの取組が必要ではないのでしょうか。

そういう意識をもてた時に先生たちは、AIドリルを本気になって自分の学校でやることを考えるようになるし、保護者も子どもたちが家庭学習で「よむYOMUワークシ

ト」をする時に、親子で一緒になって考えたりして、家庭でも読解力を高めるための取組が進んでいくような環境が整えられていくと思います。やっぱり、そういった意識づくりとか環境づくりとか、そこが大切かなと思ったのが一つです。

それからもう一つは、本市はICTの活用を非常に重点的に取り組んでおり、AIドリル「navima（ナビマ）」も、とても浸透してきているいるわけですが、これが、どういう子どもたちの学びの成果をつくり出しているのか、これもぜひ継続して検証していただきたいと思います。全国的にも津山市が先導的に取り組んでいることなので、その具体的な成果を目に見える形にしていただければいいなと思います。津山市は導入しただけじゃなくて、それをこんなふうに使いなして、こんな成果を出してるんだと、全国に発信できるようなデータの収集をやっていただければと思います。

二つ目の若手教員に関しては、今教員離れとか、教員採用試験をやっても本当に集まらないという状況の中でも「教師になる」という選択をして頑張ってくれている人たちだから、きっと意欲というのは高いんじゃないかなと思います。

ただ、昔であれば採用試験に合格しなかったような子も合格しているという現実も、やはりあるといえはるので、そういう意味では、丁寧な若手教員の育成を進めていくというのは、本当に欠かせないことだと思っています。

先程、「大きな声でやらなきゃ駄目じゃないか」という話がありましたが、大きな声というのは現象、外に現れたことであって、やはりその本質は教員として自信を持って仕事をするという、その自信を育てていくということだろうと考えておりました。

では、教師としての自信はどうしたらつくのかを考えると、教師としてうまくできているという実感、例えば、「自分は今いい授業ができて」「今日はいい授業だった」というのを実感できると、次の日から声が大きくなっていくんじゃないかと思います。

そういう意味で、若手教員がどんな授業ができれば合格なのか、何かそういう評価指標的なものが明確になってくると、「この辺はできてるんじゃない？」とケアに語るのではなくて、客観的に実践力の評価をしながら指導できるようになると思います。

また、実践力というのは、リフレクション、振り返り、自分のやったことをふりかえることの中でしか獲得されていかないものです。これは、学校の先生だけじゃなくて、あらゆるプロフェッショナルの専門性というのは、リフレクションによって向上されると言われています。そういう意味では若手の先生たちが指導されることよりも、自分のやっている実践を振り返ることができる機会をたくさんつくってあげること、例えば、「今の授業どうだった？」「最近の自分の実践どうなの？」「子どもたちとの関係はどうなの？」「学級づくりうまくいってる？」と問うことで。

そして、「子どもたちの関係はどうなっているかな？」「どういう指導をすとうまくいき、どういう指導をすとうまくいかないのかな？」など、自分の実践をきっちりと省察するところをサポートする関わり方、そういう若手指導の仕組みが増えていったら、若手教員は、自分は何ができていなくて、何ができるようになってきているのかを確認でき、それが自信となって、大きな声として表現されるようになっていくのではないのでしょうか。こうした支援の仕方についても、ぜひ検討していただければと思います。

◆市長

ありがとうございました。たくさんキーワードがあったと思っております。

まず、意識改革、環境づくりですね。継続をするという、これが一つですね。もう一つは、やはり成功体験をうまく感じてもらうかということ、育成が大事だと。やはり、実践力を養うためには、リフレクションだということ。そうすれば、自信を持てると。僕は今日のキーワードだと思うんです。いや、本当に伝えることが大事ですからね。

ありがとうございました。

それでは、時間もございますので、次の「つながり」の取組の中で、本日は、「コミュニティ・スクール」について、事務局より説明をお願いいたします。

◆事務局

資料、本市教育振興基本計画に基づく進捗状況についての3をご覧ください。

コミュニティ・スクール、学校運営協議会の推進について説明いたします。

このコミュニティ・スクールとは、学校運営協議会が設置された学校のことであり、地域住民が学校運営に参画できる仕組みで、学校とともに地域も責任を担う、そういうことになります。

各校でコミュニティ・スクールとして、各学校で地域とともに学校づくりを進めることで、地域への愛着や誇りを持ち、前向きに取り組む子どもたちを育てます。

本市のコミュニティ・スクールは令和3年度に1校、津山東中学校。令和4年度に2校、鶴山小学校と勝北中学校が開始しまして、今年度は15校、9小学校と6中学校でコミュニティ・スクールを開始しております。

また来年度、17校での導入に備え準備委員会を設置しまして、学校運営協議会委員の選定や保護者等関係者への周知を図ったりしております。

コミュニティ・スクールの具体的な取組としましては、学校運営基本方針の承認、年間計画、具体的活動、学力向上、校則、部活動、不登校、いじめ等に関する協議や、授業参観、給食試食会等を実施しております。

また、コミュニティ・スクールと一体的推進を図る地域学校協働活動として、中学校校区挨拶一斉運動、中学生による公民館講座開設、地域の夏祭りへの参画、小中学生合同学習会等を実施しているところであります。

中学生による公民館講座開設につきましては、コミュニティ・スクール導入を機に、中学生が小学生に学習や夏休みの宿題の絵の宿題、作文の書き方を教えたり、サッカーやリコーダー、イラスト、ダンスなど、自分の得意なものを教える活動を実施しております。

今年度も学校によっては、新たにeスポーツや、レクリエーションを教える取組も進められております。

成果といたしましては、学校運営協議会委員となることにより、学校への理解が促進していること。中学生による公民館講座開設、夏祭り参画、つやま郷土学の充実等、新

たな取組が広がっていることが挙げられます。

課題といたしましては、今後も学校とともに、地域も子どもの教育に責任を持つコミュニティ・スクールを推進していきたいと考えているところでありますが、学校運営協議会からの積極的な情報発信や、主体的な活動のあり方について検討する必要があると考えております。

◆市長

それでは、コミュニティ・スクールにつきましてご意見をお願いします。

◆教育委員

コミュニティ・スクールについては、私も昨年からは鶴山小学校の学校運営協議会会長ということで務めさせてもらってます。

昨年はコロナ禍ということもありましたので、いろいろな活動が制限される中で、とにかくこの現状を知っていくといったようなことでやっておりました。

コミュニティ・スクールになって、学校の理解が促進するとともに、一番変わったのはやっぱり情報を得られる機会が増えたということと、学校運営協議会には、守秘義務もありますので、より具体的な事案とかが共通認識できるようになったといったようなことは、本当に聞く方も、自分の身になって考えるということはあるかなというふうに思います。

具体的には不登校の現状であったり、いじめのことであったり、中には家庭に大変大きなトラブルを抱えた子どもさんもあったり、外国人のお子さんのことがあったり、そういった本当に個別事案についての案件を、みんなで考えられるようになったということは非常に大きかったかなというふうには思います。

あとは、地域との学校地域協働活動の方とかも入ってもらってるんで、実際されている具体的取組のことで、今度こういったことをしていきたいといったようなことについては、「どういったことが課題なんです」といったような事柄も上がってくると。

まだまだ本当に手探りの状況で、途中ではあるんですけども、現状では、そういった活動に対する課題とか、学校の抱えてる課題の、共通認識というところは進んできてるのかなと思います。

今後については、やはり情報発信ですとか、主体的にどういった活動を取り組んでいくのかが、今後の課題になってくるだろうなというふうには感じています。

◆教育委員

コミュニティ・スクール、本当に今急速にと言いますか、各校が取組を始めておられておると思います。

私のところも、去年から準備を進めまして、もう今年は大分会議を進めております。

その中で話題になるのがやっぱり地域の力というか、そういうものをどれだけ発揮できるようにするかなと。それでよく言われます部活動の問題、地域力といいますかね、

そういうところで、どれだけカバーができるのかとか、それから小中一緒に合同で取り組むことが多くなってきておりますが、そういう話が発展していく中では、今子どもたちの、児童数、生徒数がすごく激減している現状があります。

それを見据えて、じゃあコミュニティ・スクールは何をするべきなのかということ、加茂の場合は、小中一緒にやっておりますので、会議はもうダイレクトです。もうどうせするんなら、小中一緒になるような義務教育学校に持っていきゃええがな、というような話まで出てきております。

ですから、バラバラの小学校、中学校という取組というものではなくて、小中一緒になってどう考えていくんならというような話が今出てきておって、もう本当に逆に今度は津山市の方に聞いてみないといけないなと。

津山市がどういう方針を持って、これから進めようとしているのか、というあたりが話題になるんじゃないでしょうか。

また先程申し上げました加茂の場合は、小中一緒のコミュニティ・スクールでございますので、話題がダイレクトに将来像まで進めてきておるところでございます。

◆教育委員

コミュニティ・スクールすごい勢いで進んでますが、将来的には、今は学校発信でしてますけど、さっき説明で言われたように、いまいち普通の地域の人がコミュニティ・スクールを知らないのが現状かなあと。ただ本来は、やっぱり地域の学校だということを知っている人たちが、一人一人みんなに意識してもらって、今フリースクールに関わって、運営協議会のメンバーなんか、私たちの代表で行ってもらっているというぐらいの認識で、地域が育てば、もっともっと主体的な活動というか、地域の中で小学校どうしたい、とかそういったところがもうちょっと、自分の問題として、地域の問題、地域の課題だとか、地域を良くしようとか、地域の人たちが一人一人が、コミュニティ・スクールに目を向けていただいて、より良くなるためにどうするかって、協議会に参加してくださってる人達は、私達の代表で出している訳で、私たちは何かできることがあればやるよってというようなまちづくりというか、地域づくりが必要なんだろうなと思います。

とても福祉的な話になるかもしれませんが、例えば給食試食会も、その協議会のメンバーだけじゃなくて地域の人に学校に行ってみませんかとか、参観してみませんかとか、地域の人でも学校のすごく近い関係で、何か普段から関わりがあると困ったときには、地域の人が助けてくれたり、協力してくれないかなあと思ったら多分、そこになるまでにはかなりの力が必要だと思うんですけど、そういうのがコミュニティ・スクール、こうなればいいなという将来像かなあと思っています。

だからまだこれ、まだ初めの一歩二歩が始まったばかりなので、これから光岡さんとかには頑張ってもらって、モデル校みたいなモデル地区になっていただけたらなと思っています。

◆教育委員

学校運営協議会で、学校の情報を共有できる。また、育成したい子ども像や課題について協議して、中学生による公民館講座の開設、夏祭りへの参画、小中学生合同学習会などが取られるようになったということでもあります。

このことは、地域がサポーターから、学校と地域がパートナーとなったということ、地域とともにある学校へと変わってきたことを表す取組かなと感じています。

学校と地域の両者が責任を持って子どもを育てるパートナーとして、次の段階は運営協議会の委員で協議するだけではなくて、委員以外の地域の方や保護者や、あるいは教職員、また、小、中学生児童、生徒など多くの関係者で、一つのことをテーマに熟議を行うことがとても大切であると思っています。

先日、視察に行かせていただいた浅口市の教育委員会の皆さんも、コミュニティ・スクールの重要な視点は熟議である。熟議を行えば、コミュニティ・スクールということが深まっていくのではないのでしょうかと言われました。テーマに向かう意識や行動が高まり、当事者意識の向上に繋がると感じています。

これは、持続可能な地域の取組にも繋がっていくのではないかと感じています。

また、多くの方が参加されると情報発信にもなると感じています。

◆住野ディレクター

私も岡山市で地元の中学校のコミュニティ・スクールの委員をしておりまして、やはりコミュニティ・スクールを作ることは、学校にとってもいいことがあるし、地域にとってもいいことがあるし、子どもたちにとってもいいことがあります。この三つにとっていいことがあるということが共有されると、「コミュニティ・スクールを広げていかなきゃ駄目だ」「実のあるものにしていかなきゃいけないかな」となっていくんだろうと思います。この三つのメリットを、しっかりと追求していくことが大切かなと思っています。

それから、コミュニティ・スクールの運営委員会の中では、学校に集まった地域のいろんな人たちが、学校のことだけを話すんじゃなくて、あわせて、「この地域をどうするか」「この地域の子どもたちの5年後、10年後をどうするのか」という議論もされていきます。「コミュニティ・スクールって地域の拠点づくりでもあるんだなあ」とも思います。

そういう意味で、このコミュニティ・スクールの事業というのは、学校、教育委員会だけが関与するだけじゃなく、もっといろんな部署が関わり、地域づくりをどうするかを考える一つのステークホルダーとしてコミュニティ・スクールは位置づくものだと考えることによって、ダイナミックな動き・取組ができるんじゃないかとも感じました。

◆市長

ありがとうございます。

まず、具体的に情報が得られる機会が増えたということがいいことだと思いますね。

これは非常によかったと思います。

住野先生が地域づくりの拠点だと言われましたが、福見先生の地域では、義務教育学校だっていう話も中で出てるんですかね。また、津山市の方針については、お知らせをしたいと思います。

こういう話が実際にコミュニティ・スクールで出ているということが、これまた一つの意義といいますか、この制度をやっている意味があるんじゃないのかなというふうに思っています。

また、コミュニティ・スクールを知らないというのは困りますね。関心を持ってもらえるように、もっとしっかりと発信していかなきゃいけないですね。

そして自分事として、サポーターからパートナーへということで、先生もおっしゃいましたが、やっぱりそういった視点も必要だと思うんでありますけれども。

とりあえず、来年度には全校に整備をしてみたいと思っています。よろしく願い申し上げます。

そして最後の、「郷土愛」の取組より、「郷土愛の醸成」。教育長が非常にいろいろおっしゃられてる中で、「自己肯定感」と横並びで「郷土愛」といつもおっしゃられています。この、「郷土愛の醸成」につきまして、事務局から説明をお願いします。

◆事務局

資料の、教育振興基本計画に基づく進捗状況についての4をご覧ください。

「つやま郷土学」の充実についてご説明いたします。

昨年度から、「つやま郷土学」と題しまして始めております。津山の歴史、伝統、地域の様子等を児童、生徒が主体的に学ぶ。そして、各学年の発達段階に応じたねらいや本市・学区ならではの具体的活動等を市内小中学校の全学年で教育課程に位置付けて、郷土を知り、地域の発展に尽くした先人の働きなどを学習することを通して、「郷土愛の醸成」を図るものであります。

また、週末等には、教育委員会主催による「つやま郷土学」に関する講座を開催しております。取組の具体として、つやま郷土学に関する授業へのゲストティーチャーの招聘、全小学校6年生の津山洋学資料館の見学。バスを利用した津山圏域クリーンセンターや浄水場、警察署、消防署等への校外学習。大分県中津市、島根県津和野町との三津同盟による学校間交流。地元出身の書と彫刻が一体となった彫書という芸術を創った、彫無季（ちょうむき）氏に関する学習。つやま子ども観光ガイド育成塾、今年度は津山の牛肉の秘密についての内容でありました。

小学生親子、また、中学生対象企業見学バスツアー、つやま子ども未来塾、今年度は、美作大学と連携した津山産食材を使った親子での弁当づくりや、津山高専と連携した紙飛行機講座等を行っております。

また、別紙資料5枚目上側（右端9ページ目）にもありますが、各校では作州餅や、ジャンボピーマン、横野和紙、ホテル、古墳等の地域の特徴を生かした様々な取組をしております。

その下側のページ（右端10ページ目）ですが、清泉小学校の例として、地域の高齢者を講師とした学区内を流れる、農業用水に関する4年生の学習を示しております。江戸時代に、住民たちが土を掘って作ったこと、現在も自分たちの暮らしに大いに役立っていること等を地域住民から直接聞くことができます。実際に地域の人に案内してもらって見学し、当時の課題や人々の願いに着目して、様々な苦心や努力により、当時の生活の向上に貢献したことを理解することができると思います。

そして次のページ（右端11ページ）には、三津同盟の様子を載せております。昨年度は、オンラインで交流をしております。

最後に下側のページ（右端12ページ）ですが、彫無季氏の取組を載せております。

子どもたちも実際の体験活動をしまして、すごく集中して楽しんでいる様子がよくわかりました。

成果といたしましては、つやま郷土学を契機として、学校の実態に応じた特徴ある取組が充実してきていること。三津同盟による学校間交流等では、他県との学習活動が展開されていること。三津同盟のほかにも、例えば佐良山小学校では、佐良山学と銘打ち、島根県隠岐の島の小学校と後醍醐天皇をゆかりとした交流を今年度始めております。

課題としては、彫無季氏に関する学習や三津同盟の学校間交流は現在数校にとどまっているので、取組をぜひ拡大していきたいと考えております。

◆市長

ありがとうございました。それでは、郷土愛ということで、ご意見をいただいてまいりたいと思います

◆教育委員

資料にもありましたように、学校の実態に応じた取組が実践されてきていると感じています。学区の歴史、伝統、地域の様子を教師が総合的な学習の時間等に取り入れて単元構成をしていると思います。

先日、西小のICT活用の事例発表の中に、「100年後も豊かなまち津山城西へ。観光、食、つくる」をテーマに児童が企画書を作成し、プレゼンをするという取組の説明がありました。30時間で取り組んでいる。非常にいい取組だなと感じています。

また、加茂中は、総合的な学習の時間にSDGsの視点で「加茂・阿波地区の課題の解決を考える」に取り組み、文化発表会で発表しているそうです。

見学したり調べたりするだけではなくて、その結果を私たちの地域のためにどうしていくかを考えて、発信・行動するまでを学習とするということが、一層郷土愛が深まる一つの例なのかなと思います。

以前、他県の総合的な学習の時間の研究校に行ったことがありますが、発信・行動する例として、絵はがきにするとか、駅に観光PRを掲示するとか、修学旅行の時、街頭で観光をアピールするパンフレットを配るとか、梅の産地では梅の里ジュースを作るとかを聞いてきました。見学したり調べたりするだけではなくて、その結果何をしていく

のか、という取組までがとても重要であると感じています。

◆教育委員

学校訪問とかに行くと、それぞれの学校でやっぱり地域のことを掲示したりとか、先生方もとても普段から意識されて、取り組んでいらっしゃるということが伝わってきています。

あと、給食ですね。地産地消のものを給食で使ってもらおうとか、そういったことも、地域を知ってもらうため、一番わかりやすいのかなと思います。

先程も言われましたけど、自分たちが住んでるまちを、自分たちの問題、課題、プラス将来どうしたいっていうところまで、進んでる学校もありますし、まず探検しようってことで、秀実小学校ではよくみんなで探検してる、っておっしゃってましたけども、本当に地域を知ることと、それから地域のこれからのことを考えてもらうのに、小学校、中学校、とてもよく取り組んでいらっしゃるなと思ってます。

プラス先程のICTが入ると、それをどうプレゼンするかまで行くので、本当に本気で調べる。図書館の「調べる学習コンクール」とかでもテーマが結構高度な発表もあるので、確実にこの辺りは子どもたちに浸透しているんじゃないかなあと実感しています。

今後も、たくさんこういった活動をしっかりしていただいて、目の前の自分の住んでるところに興味を持ってもらえるような教育が、進んでいけばいいかなと思います。

◆教育委員

つやま郷土学における各校の取組例がたくさん出ておるんですけども、この中で清泉小学校の方の4年生の「真瀬用水を学ぶ」というのがあるんですが、実はこれは、清泉小学校区には6町内会がありまして、そのの老人会の方がそれぞれ各学年ごとに張り付いていただきまして、いろんな取組をしてくださっています。

例えば、昔遊びをしようと一緒に、お手玉とかいろんなものをしたり、それから昔の農具を各自家から持ってきてくださって、これは米をはかる道具なんでもとか、いろんなものを教えていただいている。とても今人数が減ってきたんで、今の現状はちょっと把握しきれてないんですけど、昔はそういう活気のある各学年ごとの取組ということで、その中の4年生が催しを学んでやっておられたと思います。

それぞれの学校でいろんな地域の歴史というものもあると思うんです。私は加茂の方なんですけど、山持ちの方が子どもと一緒に植林のことを教えてくださって、木を育てるにはどういうことがあるのかとか、例えば、枝打ちをしたりとか、間伐をしたりだとかそういうことをしながら素晴らしい森林、山を作るんだというふうな話もずっと子どもにしてくださっておりました。それから中学生になりますと、木工関係の授業。大工さん呼んできて、木の組立をしたりとかいうようなものもありました。

それで私が最後に言いたかったのは、今、古い歴史の話ばかりでしたが、私は、郷土学ということで考えるのでは、今、加茂中学校の子どもたちが、マラソンのお手伝いをしてきてます。津山加茂郷フルマラソンという大会が、今度来年31回になるんですけど、もうそれだけの歴史を持っている行事なんですけども、それに中学生が関わ

ってくれている。と言っても地域を愛するというわけではないんですけれども、子どもたちが中学校の時にこんな提案をしたなあとかということで、ずっと思っていて、卒業していってくれば嬉しいな。そしてまた、大人になってまたマラソンに参加するというようなこともあっていいなあとあって、そういうものも郷土学の一つにならないかなということをお個人的には思っております。

◆教育委員

私も自分が住んでる地域が好きというのは、やっぱり非常に大切なキーワードというか、やっぱり自分の住んでる地域とか国とか、そういったところが好きでないと自分のことが好きというですね、自己肯定感とかそういったのにも繋がっていかないのかなというふうに思いますので、こういった津山の自分の住んでるまちを調べて、学んでいって、好きになっていく活動というのは非常にたくさん行われてますし、こういった取組はぜひとも今後も続けていって、さらに拡大して、郷土愛の醸成になればなというふうに思います。

その中でも、三津同盟。これは鶴山小と林田小の2校になるんですけれども、鶴山小で見させていただきました。今鶴山小の6年生は自分の小学校以外に、よく知っている小学校っていったら津和野小のことになります。

普通、別の小学校のこともあまり知らないんですけれども、津和野小のことはよく知っているといったような形です。

オンラインを通しての交流ですけれども、やっぱり人に伝えるっていうためには、自分たちで一生懸命、自分たちの地域のことを勉強しないといけない。どういことを伝えようかと言って子どもたちが一生懸命考えると、それがやっぱりこの洋学資料館とか見に行ってもですね、ただ、受動的に学ぶのではなくて、必死で能動的に子どもたちが何をどう伝えるか、といったことを考えていくことに繋がってるんじゃないかなというふうに思います。

それとやっぱり離れた地域に、自分たちのことを知る、自分たちが知る地域がある、というのも非常にいいことだなというふうに思います。

津山と宮古島市の関係もずっと続いてきたようにですね、こういった他地域との交流というのは非常に有効であると思いますので、これが取組拡大されていくという方向性もありますし、他の学校にもいろいろと広まってるのが、郷土愛の醸成にも繋がっていくのかなというふうにも感じます。

◆市長

ありがとうございました。

それぞれの立場から、具体的なご意見、ご提案をたくさんいただけたと思っていて、今後具体的な取組を教育委員会と協議しながら進めてまいりたいと、このように思います。

最後に、住野先生から、今日2年目のふりかえりとちょっとテーマが大きすぎたんで

ありますけれども、この総括をいただけたらと思いますので、よろしくお願いします。

◆住野ディレクター

今の郷土学に関わって言いますと、評価シート 54 ページのデータが県調査の小学校 5 年生、中学校 1 年生、2 年生、全国調査の小学校 6 年生、中学校 3 年生と学年が進行するに従って、パーセントが下がっていったるんですね。つまり、小学校の時までは高かったのが、中学校になると下がってしまうというデータが出てきていて、これが、ちょっともったいないと思います。

小学校の時に感じた「地域が好きだ」とか「地域のことを考えたい」という気持ちが、中学校になって下がってきてしまっているの、ここをもっと高めていくような取組が必要かなと思いました。例えば、小学校低学年は「地域を見る」、中学年は「地域について知る」、高学年になると「参加する」、中学校になったら「提案する」と、何か大まかなカリキュラム的なものを提示した方が、具体的な成果が上がってくるのではないかなとも思いますので、これについては今後検討してほしいと思いました。

それから、全体に関わって言いますと、やっぱりこの 3 期の振興基本計画というのが、本当に着々と取り組まれ、成果を上げてきていることに、私としてはとても嬉しいというか、安心したところでございます。

振興基本計画ができたときに、私は教育委員会の皆様に「これが市民に伝わるように YouTube 動画を作って発信してください！」とお願いしたんです。そしたら上手な番組ができました。一体何人が今まで見たのか、ぜひそのカウントもチェックしたいと思うんですけれども。やはり、振興基本計画は教育委員会だけが実現するんじゃなく、市の全部局がそこに参画し、そして市民も参画しながら実現していくものだと思っていますので、ぜひこの総合教育会議で、振興計画を共有していただいて、市を挙げて実現に向けて取り組んでいただければいいなと思います。

そして、今日の議論を聞いていて、非常に教育委員さんも前向きな発言をたくさんされていまして、市長のリーダーシップのもと、ぜひ教育委員さんの知恵も出していただきながら、振興基本計画の実現に向けて、素晴らしい成果を上げるよう取り組んでいただければいいなと思います。

◆市長

住野先生、ありがとうございました。それでは、教育長お願いいたします。

◆教育長

ありがとうございます。

実は、教育振興基本計画の検討委員会の最終日の、最後の住野先生の挨拶は今だに覚えてるんです。

それは、この第 3 期の計画の特徴は三つある。一つは、これからどんどん進める必要が鵜がある。「ICT 教育」。このことが一つ。

それからもう一つは、「郷土愛」。この「つやま郷土学」と命名されたのも、住野先生から「こんなものどう？」という提案があって、つやま郷土学が始まったと思うんです。

それから三つ目は、「PDCAサイクルをしっかりと回す」。そういうような振興計画になればいいかなという、最後のところにはその話も出てますけども、そういう点では今日の会議というのは、4年間のうちのちょうど折り返し点でのPDCAのチェックができたのではないかと考えています。

まだまだ本市も大きな課題がありますが、一つ一つ着実に前に進んでいるという実感もしていますし、また目標指標、これらも数字に一喜一憂するわけじゃありませんが、一つの目標ということで、そういうものを一つ一つ大事にしながら、目標と目的を今後しっかりと見据え、前に進んでまいりたいと思っておりますので、今後も引き続き、ご指導の方をよろしくお願いしたいと思います。

◆市長

ありがとうございました。委員の皆さん方にですね、今日ご意見を頂戴したわけでありまして、住野先生から最後にいただきました、成果が上がっているということは大変ありがたく思っております、このまま継続して頑張るということでもありますけれども、やっぱり市全体で共有するようということですね。教育の分野ということだけではなくて、確かにそのことをやる必要があるということでもあります。

それから、今日教育長が申し上げましたが、PDCAサイクルのチェックをしたということでございましょうからですね。また残りのアクションに向けてですね、しっかりと取り組んでまいりたいと思っておりますので、どうぞこれからもよろしくお願いしたいと思います。

本日の議題はですね、以上でございますけれども、実はですね、12月24日をもって、福見委員が任期満了を迎えられるということでございます。

今日この場をお借りいたしましてですね、福見委員から一言お言葉を頂戴したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆教育委員

教育委員退任にあたりまして、一言ご挨拶をさせていただきます。

4年間、教育委員として皆様とご一緒に活動させていただきました。本当にありがとうございました。

私は、学校長を退任してからちょうど10年になります。その間、児童・生徒の環境は著しく変化してきたように思います。コロナ禍の中、児童・生徒たちの環境が制限され、思うように友達と遊んだり、相手の顔を見て会話をしたりすることができなかつたように思われます。

一昔前までは、1台のパソコンを数人で利用していましたが、今では1人1台のタブレット端末を活用して、先進的な授業展開に挑戦する姿が、時代の進歩の一端を見たように思います。また、コミュニティ・スクールも大きく前進したように思われます。

しかし、いくら学習環境が進んでも、児童・生徒には、学習規律の確立や、落ち着いた学習展開が必要不可欠と考えています。

これからも、津山の未来を託す子どもたちのために、大いに力を発揮していただければと思います。ありがとうございました。

◆市長

福見委員におかれましては、4年間本当にありがとうございました。本市の教育行政の推進に対しまして、大きな貢献をいただきまして本当にありがとうございました。

どうぞこれからも、これまでの知見やネットワークを生かしていただきながら、これまで以上のご支援をよろしくお願いを申し上げたいと思います。心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

それでは事務局にお返しをしたいことです。

◆事務局

それでは最後でございますが4 その他、何かございますでしょうか。

～ 発言なし ～

特段ないようでしたら、次回第3回につきましては、2月22日に開催を考えております。ご案内を別途送付いたしますのでよろしくお願いいたします。

それでは以上をもちまして、令和5年度第2回津山市総合教育会議を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。